# 品川哲彦氏からのコメントへのリプライ

戸谷洋志[1]

品川哲彦氏(以下、品川と略記)から筆者へ寄せられたコメントの主たる論点は、次の三つであるように思う。第一に、筆者が発表原稿において「直感」と「直観」を混同しているということであり、「それに対応するしかたで惹き起こされているのかもしれぬ直観と感情の混同が、ヨナスの議論を正確に伝えておらず、発表の主題を無用に混乱させているという点」[2]である。第二に、筆者が試みた直観主義的基礎付けの擁護が、結局は、「乳飲み子を乳飲み子として直観しない人間に、そのように直観しなくてはならないと要求できる根拠」[3]を求めるヨナスの批判者に対して、応答しうるものではない、という点である。第三に、筆者が発表原稿において「責任が力の関数であるという重要な点への言及が(ほとんど)なかったことは、倫理規範としての責任を考えるには、不十分ではないだろうか」[4]という点である。以下では、この各々の点について、応答していく。

第一の点について、筆者による「直感」と「直観」の併用が混乱を招くという点については同意するものである。『責任という原理』においてヨナスが「直感　Gefühl」という語を用いるのは、品川の指摘する通り、主として合理的根拠から区別されるところの感情的根拠としてであり、これに対して「直観　Intuition」という語は、目的保持性それ自体が、無目的性に対してもつ無限の優越性に関する「固有の明証的な直観」[5]として用いられる。では、「乳飲み子」の認識は、「直感」だろうか、それとも「直観」だろうか。責任の感情を引き起こす「事柄　Sache」は目的保持性を備えた生命でなくてはならない。また、そうした感情が引き起こされるためには、それに先立って「私」が「事柄」を生命として理解しているのでなければならず、そこでは非生命に対する生命の無限の優位を見抜く「直観」が得ているのでなければならない。そうである以上、責任の「感情」は生命の善の「直観」を根拠にして成り立つ、と考えることができる。筆者の主張は、「乳飲み子」を「看る目」

---

[1] 戸谷洋志（とやひろし）。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程。
[2] 本号、73 頁。
[3] 同上。
[4] 同上、74 頁。
[5] Jonas, Hans, *Das Prinzip Verantwortung; Versuch einer Ethik für die technologische Zivilisation*, Suhrkamp, Frankfurt am Main, 2003(1979), S.155.

が、対象を非生命から区別されるところの生命として認識する能力として解釈する試みであるため、「乳飲み子」の認識は「直観」であるべきである。以上の検討に即して、本号 57-70 頁に収録した論文では「直観」と表現を統一的に改めた。

第二の点について、まず筆者の主張を確認しておきたい。ヨナスに拠れば、「乳飲み子」は存在と当為が結びついた存在者である。「数学的物理学者の分析的な眼差し」[6]は「乳飲み子」の存在のうちに当為を認めることはできないが、それは、物理学者が「乳飲み子」をあくまでも分子の集合体として捉え、「乳飲み子」そのものとしては捉えていないからだ。「乳飲み子」を「乳飲み子」として捉えるには、「数学的物理学者の分析的な眼差し」とは異なった「看る目」を使うのでなければならない。この「看る目」という概念は、『生命の哲学』における、生命の認識者はそれ自身が生きていなければならない、という主張に基づけられている。つまり、「私」が既に「乳飲み子」的なものであるからこそ、「私」は「乳飲み子」を「乳飲み子」として認識することができる。筆者のこの主張が退けているのは、「乳飲み子」を「乳飲み子」として認識しながら、そこに当為を洞察しない可能性である。

確かに品川の指摘するように、筆者は発表原稿においては、「乳飲み子を乳飲み子として直観しない人間に、そのように直観しなくてはならないと要求できる根拠」について言及しなかった。この問題に応答するために、『生命の哲学』へと文脈を移して考えるならば、それは「生命を生命として直観しない人間に、そのように直観しなくてはならないと要求できる根拠」の必要性として捉えなおすことができる。ヨナスは同書において、「生命を生命として直観しない人間」として「行動主義者」を引き合いに出しながら、この根拠の必要性を次のように基礎付けている。

> 行動主義者は、抽象的な次元では、自分を自らの方法の対象に数え入れなければならない。しかし具体的な次元では、行動主義者は自分の主張の妥当性を要求するために、少なくとも自らのテーゼを根拠づける自身の論証に関しては、自分をテーゼの対象から取り除くという暗黙の留保条件を付さなければならない。さらに、自分の論証がその長所によって評価されることを望むために、行動主義者は学問上の対話の相手も自らのテーゼから除かねばならない。行動主義者は対話の相手の判断能力に対して論証を向けているからである。しかしその一方で、行動主義者はやはり対話の相手を同時に、自らの学問の方法が有効であるはずの「私以外の他の人々」の例と見なさなければならない。こ

[6] ibid., S.236.

のようにして行動主義者は、対話の相手から、討議の内部と外部に同時に立つという決して誠実ではない二重の立場にあると見なされてしまう。[7]

つまり、例えば、「行動主義者」が「生命を生命として直観しなければならない根拠はない」という主張をするという行為自体は、「自分」と「学問上の相手」が生きた有機体であることを必須の前提としているのである。そうである以上、その主張は遂行論的矛盾(という表現をヨナスが用いることはないが)に陥ることなしには実現しえない。このように、「決して誠実でない二重の立場」の回避によって、ヨナスは、生命を生命として直観しなければならない根拠を考えている。

第三の点について、ヨナスの「力」の議論に関する言及が発表原稿において不足していた点については同意し、論文では読者の誤解を招かないよう、改善を試みた。

[7] Jonas, Hans, *Organismus und Freiheit: Ansätze zu einer philosophischen Biologie*, Vandenhoek &Ruprecht, Göttingen, 1973, S.184.